# 田中遺跡の調査

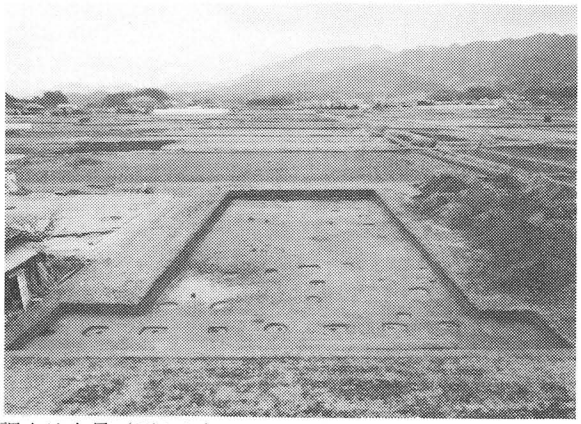
（昭和51年1月～昭和51年3月）

この調査は，橿原市田中町字垣添の住居建築工事に伴って実施した。調査地は水田で，和田廃寺塔跡の北約200m，馬立伊勢部田中神社の東方約100mに位置する。現在，推定田中宮跡あるいは田中廃寺ともされている現「法満寺」からは東南に約150m隔っている。調査地域周辺の地形は，和田廃寺が位置する台地から北へ向かって段状に低くなっている。（38頁の地形図参照）

検出した遺構は，堀立柱建物1棟，柵1列，溝1条などである。

調査地の基本的な層序は，上から，耕土，床土，黄灰砂土，暗灰粘質土（流木を含む堆積土），青灰砂質土（沼土）の順である。ただし，東半部は砂土の侵蝕によって，暗褐粘質土はブロック状に存し，ただちに青灰砂質土となる。このため遺構検出面は，西半部では暗褐粘質土の上面，また東半部では，青灰砂質土の上面であった。

南北柵のSA050は，15間分，31.20mを検出した。柱間寸法は北から4間目が8尺で，ほかは7尺である。掘形の形は一様ではないが，方約0.7m，深さは約0.5mを残す。うち8カ所には直径20cmの柱痕跡がある。この柵の柱筋は方眼北に対し西に約20′偏している。なお，この南端柱穴の西2.4mで柱穴を検出したが，この柵との取り付きは不明である。

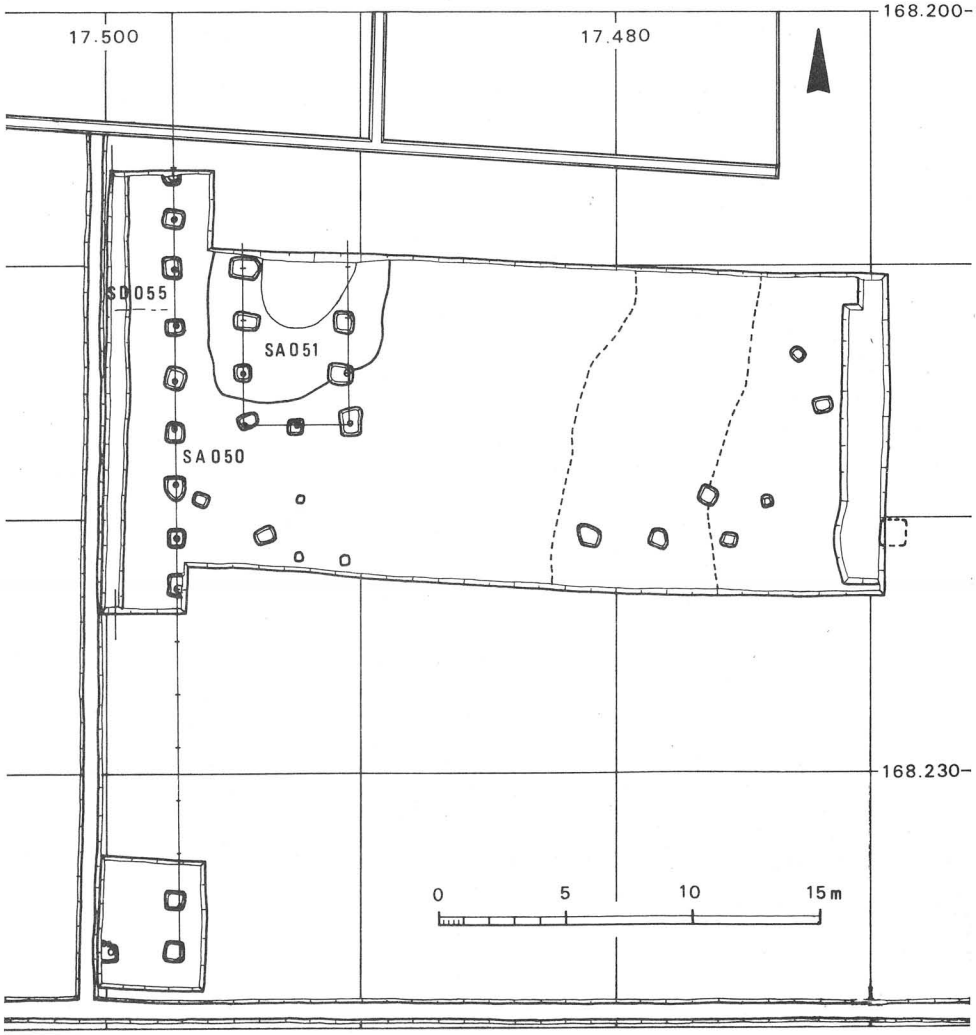

調査地全景（西から）

SD055は，SA050の西2.4mに位置する素掘りの南北溝である。17.5mにわたって検出した。幅0.8m，深さ0.2mを測る。埋土からは，7世紀代の土師器・須恵器が出土した。なお，発掘区東端で7世紀前半に属する，墨書（判読不明）のある須恵器の蓋1点を検出した。

SB051は，桁行3間以上，梁行2間の南北棟の掘立柱建物である。SA050の東2.7m に位置する。柱間は桁行，梁間とも7尺等間である。柱掘形は不整方形を呈し，SA050と同様である。5ケ所の柱穴に直径20cmの柱痕跡を認めた。

以上の柵，溝，建物は，いずれも同一の軸線方向をとり，また柱間寸法も共通することなどから，これらの遺構は同時期のものと考えられよう。

以上，調査結果について述べたが，調査面積の狭小なこともあり，SA050が何を区画するものであるか，その性格は決し難い。この近傍に想定されている田中宮跡に関連するものであるか否かはなお検討を要するが，年代的にはこの時期に相当するものと考えられ，今後広範囲の発掘調査が期待される。




田中遺跡遺構実測図